

地方創生と伝統行事 ～土地の記憶を行動で共有する～

②「肥土山と中山の虫送り」

上席専門職 平沼 浩

目次

- | | |
|------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 肝心な部分を地域で育てる |
| 2. 肥土山の虫送り | 5. まとめ |
| 3. 中山の虫送り | |

1. はじめに

前号（本誌No.147）に続き、地域の伝統行事として香川県小豆島の「肥土山と中山の虫送り」を紹介したい。目的は引続き、住民主体による地方創生の一助となるヒントを導くこと、主なキーワードは「住民」、「復活」、「行動」、そして「物語」の4つである。

周知のとおり小豆島の虫送りは、映画『八日目の蝉』やその原作小説とも相まって脚光を浴びている。

(1) 虫送りとは

虫送りは、「稲につく害虫を追い払う行事」と説明される。虫害は早魃や風水害等と並んで稲の成長を阻害する災害であり、虫送りは先人たちの生活防衛策だったと観念できても、その実際を知る機会は少なくなっている。

そもそも、虫送りとはどのようなものだったのだろうか。『日本民俗大辞典』から要点を抜粋してみる。

① 実施地域

農業普及以前は日本各地の農村で盛んに行われていた。特にウンカの被害が多かった西日本で盛んに行われた。

② 実施時期

主に田植えが終わる5月から7月頃の稲の生育に重要な時期に行われていた。

③ 一般的内容

村人がその地域の神社か寺に集まり神事や法要を行ったあと、松明の火を焚きながら鉦を鳴らし、太鼓を叩き大声で唱え言をしながら幟を立てたり札を掲げて、行列を組んで水田を巡って稲についた虫を集めて村境まで送り出す方式が一般的だった。

④ 藁人形を作る例、人名が登場する例

藁人形を作って虫送りの行列とともに送り出す例もあり、また、人名が登場する場合の代表例として、サネモリサマ（実盛様）があげられる。

⑤ 送り出し方の3類型

- ・村境まで送り出し、そこで人形や松明を焼き捨てるタイプ。
- ・川や海に流して捨てるタイプ。
- ・上流の村から下流の隣村へと次々にリレー式で送り、最後の村で海へ放り捨てるタイプ。

いずれにしても、村落の生活圏外に害虫を放逐する点で共通する。

(2) サネモリ（斉藤実盛）とは

文化庁の『日本民俗地図Ⅰ解説書』や文化庁監修の各都道府県別『日本の民俗』シリーズ、神野善治の「虫霊と御霊」によれば、東海地方の愛知県、岐阜県から、近畿、中国、四国、九州北部の福岡県、長崎県、大分県にわたり虫送り行事にサネモリという名称が広く分布していたことが分かる。東日本には地域の義民や義僧らしき名も見られるが、西日本には行事名称そのものをサネモリ送りと呼ぶ例、行列の先頭に馬に乗ったサネモリ人形を配す例、サネモリ塚という供養施設を有する例など、サネモリの名称が頻出する。斉藤実盛とは、いかなる人物だったのだろうか。

① 斉藤実盛の略歴

斉藤実盛は平安時代末期の武将である。天永2（1111）年に越前国（福井県）に生まれ、少年時代に武蔵国幡羅郡長井庄（埼玉県熊谷市妻沼・長井地区）の斉藤実直の養子となる。

源義朝（頼朝・義経の父）また源義賢（義朝の弟で木曾義仲の父）の配下にあっただが、主君の敗死後に所領支配が平家に移ってからは平家の配下となる。最期は劣勢の平家にあつて加賀国篠原（石川県加賀市篠原新町から手塚町一帯）の合戦（5月21日）で木曾義仲軍の手塚光盛に討たれ73歳で戦死した。

その最期は、『平家物語』や『源平盛衰記』で知られる。篠原を死に場所と定めた実盛は、老武者と侮られぬよう白髪を染め、ただ一騎



埼玉県熊谷市、妻沼聖天山にある斉藤実盛像。筆と手鏡を持ち白髪を染める73歳の姿。面前で尋常小学校唱歌「斉藤実盛」を聴ける。

で臨み、名を名乗ることも拒否して討死する。その首検分の後、木曾義仲は「七箇日の養父」と呼び涙する。実盛はかつて孤児となった幼少の義仲を救った命の恩人だった。

石川県加賀市手塚町の首洗池には、実盛の首を抱いて天を見上げる木曾義仲像がある。

② 稲株に躓き無念の討死という伝承

『日本民俗大辞典』は、サネモリは稲株に躓いて無念の最期を遂げたため、稲を恨んで害虫となったという伝承を紹介している。

ただし、伝承の存在は事実でも、篠原合戦は5月である。稲株に躓いたとは考えにくい。

③ 虫送りとサネモリに関する2説

虫送りとサネモリの関係について、『日本民俗大辞典』は、正反対の見方を紹介している。

- ・御霊信仰から非業の死を遂げたサネモリの怨霊が祟りとして害虫となったという見方
- ・言霊信仰からサネモリという名は実（サネ）を守る霊験の神という見方

サネモリは、稲に害なす怨霊か、稲を守る神か、見方は定まっていない。

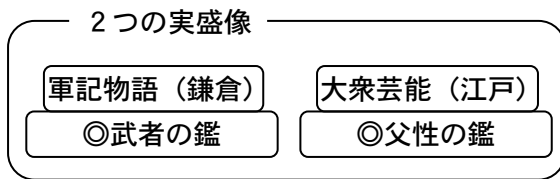
④ サネモリという名称の普及

柳田國男は、小論「実盛塚」において実盛が生まれ育った場所や討死した場所と関係のない地方にサネモリの名称が登場することに注目し、名称普及の背景として、『源平盛衰記』という物語の流行と西日本に蔓延した享保17（1732）年の虫害をあげている。

⑤ 物語の中の実盛像

柳田の指摘した名称普及の観点からすれば、『源平盛衰記』の派生ストーリーである『源平布引滝（実盛物語）』を無視できない。

鎌倉時代に生まれた軍記物語である『源平盛衰記』と泰平の江戸時代に生まれた大衆芸能の『源平布引滝』における実盛像の特徴を一言でいえば、前者は「武者の鑑」であり、後者は「父性の鑑」である。この2つの人物像のうち、どちらがサムライではない大衆を惹きつけるかは明らかだろう。



『源平布引滝』の実盛は、まだ30代後半である。凶らずも自らのために孤児となった5歳の太郎吉に手塚光盛と名付け、生後間もない木曾義仲の最初の家来にする。

実盛は、太郎吉から「やい！サムライ、よくもかか様殺したな」と罵られ、「やい！サネモリ！」と呼び捨てにされながら終始愛情深く太郎吉（手塚光盛）に接する。そして、お前が成人したら恨みを晴らせ、加賀篠原で会おう、そのとき自分は髪を染め若やいで勝負するだろうと意味深な予言をする。

⑥ サネモリという名称の普及と実盛観

お伊勢参りと呼ばれた江戸時代の観光旅行を通じて、花の大坂で人形浄瑠璃や歌舞伎を見物した人々が話題を故郷に持ち帰るのは自然なことであり、都市で開花した芸能や文化を丸ごと故郷に持ち帰ることは有り触れたことである。その証拠に、今なお地方に残る人形浄瑠璃（人形芝居）や農村歌舞伎（地芝居）は少なくない。

西日本の虫送りにサネモリの名称が分布した背景には、害虫と化す怨霊への憎しみや嫌悪以上に、小さな子どもを慈しむ物語の実盛に対する共感があったのではないだろうか。

(3) 開催地

小豆島は、島の多い瀬戸内海では淡路島に次ぐ大きな島である。8世紀初頭の歴史書『古事記』の国生み神話にも登場する。豊臣秀吉の大坂城築城に際し、天領として石材を供給した採石場が残っている。古くから海上交通の要衝であり、複雑な帰属変遷を辿り廃藩置県後は香川県の一部となった。現在は、土庄町と小豆島町の2町で小豆郡を構成する。

人口は3万人弱、特産品は温暖な気候を活かしたオリーブ、伝統的加工品として素麺、醤油、佃煮、ごま油があげられる。島外との交通は、大型フェリーが香川県高松港、兵庫県姫路港・神戸港、岡山県新岡山港・日生港と連絡しており、自然を多く残す離島といっても複数の県都と直結する環境にある。

虫送り行事の開催地は、土庄町肥土山と小豆島町中山の2地区である。2地区の行政区域は異なるが同じ県道沿いの隣接地区である。

2. 肥土山の虫送り

(1) 豊穰祈願と虫供養

肥土山の虫送りは、肥土山自治会の資料によれば寛文元（1661）年に始まるとある。毎年、夏至の末候にあたる半夏生に行われ、平成28（2016）年の開催日は7月1日となった。まず、夕方6時頃に多門寺（護法山薬師院多門寺）で「五穀豊穰」「害虫駆除」「災厄消除」「如意円満」などが祈願され、太陽の光から取ったお燈明の火が手燭に移される。

その後、少し離れた虫塚で虫供養が行われる。虫送りは、「飛んで火に入る夏の虫」という諺が示すように松明の光に集まる昆虫の習性を利用するが、虫に退散してもらうのが本旨であるとして虫供養が行われる。

(2) 行事の主役と集合場所

虫送り行事の主役は、小学校6年生までの子どもたちである。約30年前の天野武『子どもの歳時記』には、子どもが主役の行事として紹介され、子どもが主役になったのは昭和



20年代以降と解説されている。戦時下では防空上夜間に火を灯すことは規制されていたはずである。言い換えれば、復活に際して主役を子どもたちに純化したのだろう。伝統行事の主人公ががらりと入れ替わるとは考えにくい。

集合場所は、出発点となる肥土山離宮八幡宮で、多門寺からほど近い水田地帯にある。年齢がバラバラの大勢の子どもたちは、スタートを待ちきれずに境内を駆け回っている。小さな子たちは親と一緒にいて、親同士は子育ての話に花を咲かせている。

この場所は、毎年5月に子どもも演者として参加する伝統の農村歌舞伎の会場でもある。農村歌舞伎の始まりは貞享3（1686）年とされ、茅葺屋根の舞台小屋は衣装蔵も兼ね、本番時には花道、廻り舞台、迫上がり、奈落、葡萄棚、化粧部屋、楽屋、大夫座を備えた歌舞伎舞台として利用される。木立に囲まれた境内には芝生が敷かれ、緩やかな階段状の桟敷になっており、全体が野外演劇シアターを兼ねた造りになっている。神様は客席最後部の一番高い場所から舞台を見下ろしている。

(3) 火手（ほて）

夏の午後7時はまだ十分に明るい。多門寺の住職が火をもたらし、祈願が行われ、地元で火手と呼ばれる青竹製の松明に点火される。

青竹製の火手の緑色は、山々の緑、水田の緑とよく馴染む。火手の準備は各家庭の父親あるいは子供会が準備し、高学年の児童は子供会で作り方を習うそうだ。長さは120cm程度から2m程度まで色々あるのは、手作りの味である。試しに持たせてもらうと、小さな子には手に余る太さがあり、水分を含むためか見た目以上に重量感を感じた。

火手はシンプルな構造の中に、可燃性を抑え、小さな子どもが無邪気に振り回せない工夫が施されているようだ。

(4) 子どもたちのパレードと地域の支え

八幡宮を一行で出発する行列は、民家の明かりや街路照明から遠ざかった水田の畦道を約1km先の蓬莱橋まで進む。蓬莱橋は下流域との境界線にあたるポイントである。

小さな子たちは不安な表情を浮かべながらも親に手を添えてもらい、年長の子たちは自らの成長を誇るかのように各々単独で火手を持って進む。緑の山々に囲まれた鮮やかな水田の緑に沿って、オレンジ色の光のパレードが進む。沿道ではお年寄りたちが目を細めて眺めている。

終盤の午後8時頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。少し大柄な多門寺の住職は、最後尾から行列を見届けるように歩いていた。江戸時代までの寺は、子どもたちが読み書きを習う寺子屋でもあり、住職は子どもたちの身近な師匠だった。多門寺の住職は、肥土山の虫送りが今年も無事に終了したことに満足げな感想を返してくれた。

自治会の方々、バケツとゴミ挟みを持って行列のポイントに加わり、まるで巨大遊園地の手慣れた清掃スタッフのように燃えカスの収集をしていた。蓬莱橋の下では、火手の焼却処理が行われ、自治会の方々の行き届いた運営が随所に垣間見られた。

(5) 子どもたちを育む世代間リレー

農業が普及しても、この行事が再生を続けている理由は、光のパレードが美しいといった表面的な理由だけではないだろう。



子どもたちは、地域の大人たちの保護と世話を受けながら、虫送り行事に参加している。毎年夏に火手の炎を手にするのは、子どもたちにとって、非日常的な刺激であると同時に一種の責任を委ねられる機会でもある。また、自分自身の成長を確認できる機会でもある。たとえば、3歳の夏に参加した子が6年生の夏までに参加する回数は計10回になる。子どもたちは、年毎に火手の感触を軽く新鮮に感じるはずである。毎年夏の稲の成長と子どもたちの成長が、オーバーラップする。

そして、何よりこの行事に参加することは、豊穡への祈りを共有する地域の一員としての立派なお手伝いでもある。ゴール地点の蓬莱橋では、ご褒美のお菓子が振舞われる。

澄んだ空気の中で子どもたちは、清流の音や蝉や鳥の声を聞きながら、昔の子どもたちを追体験するのだろう。そして、世話をする現在の大人たちも静かな黄昏時の幻想的な風景の中で、かつて自分たちを育ててくれた過去の大人たちを追体験するのだろう。様子を眺めるお年寄りたちも懐かしい光景を思い出すのだろう。

この伝統行事は、世代間を繋ぐ長期の愛情リレーのようである。参加する地元の親子に流れている時間は、一見の見物人の1時間とは意味が違うと感じられた。

(6) 唱え言

肥土山自治会の資料によれば、道中は次の唱え言をいいながら進むとある。

〰稲虫来るな、実盛失せろ

火手をかざして無邪気に唱えた「サネモリ」という謎の悪者の正体を知ったとき、心の成長も確認できたのではないだろうか。

(7) 肥土山の虫送りと『八日目の蟬』

今や小豆島を連想させる物語といえば、『二十四の瞳』よりも母性をテーマにした『八日目の蟬』の方かもしれない。小説に登場する虫送りは、肥土山の虫送りである。

ミステリーの緊張感をもって綴られる物語の中で小豆島は、悲劇の疑似母娘が実の母娘のように幸福な数か月を過ごす場所として描かれている。

また、『八日目の蟬』の疑似母娘の母子関係を父子関係に反転させると、『源平布引滝』の養父・斉藤実盛と幼少の手塚光盛や木曾義仲の疑似親子が浮かんでくる。この2つの物語は共に悲劇の疑似親子を題材にしたフィクションだが、一般的な親子関係にも当てはまる永遠のテーマを提起している。

それは、「這えば立て、立てば歩め、の親心」とはいうものの、「親の心、子知らず」の諺どおり、幼児期の記憶は大人と同じではないという記憶相互のギャップである。そして、まさに「子を持って知る親の恩」の諺どおり、幼児期に受けた愛情に気付かされるのは大抵子どもを保護する立場になってからである。

幼児期に愛されたというおぼろげな記憶を納得に変える糸口は、お宮参りや七五三等の



際に一緒に撮った写真やビデオかもしれない。ただし、親と子の思い出は噛み合わないのが普通であり、写真以上に説得力を持つのは、「子を持って知る親の恩」を追体験することに尽きるのだろう。

子どもを主人公に据えた伝統行事には、写真など存在しない時代から世代を超えて、親子の愛情を追体験できる仕組みが内蔵されているように思われる。肥土山の虫送りは、その一つといえるだろう。

3. 中山の虫送り

(1) 復活した虫送り行事

中山の虫送り行事は一時中断の後、映画『八日目の蟬』の撮影（2010年）を契機に復活し6年目となった。日本の映画賞を総なめにしたこの映画で、主人公の疑似母娘が参加したのは、原作小説とは異なり中山千枚田と呼ばれる島で唯一の棚田での虫送り行事である。

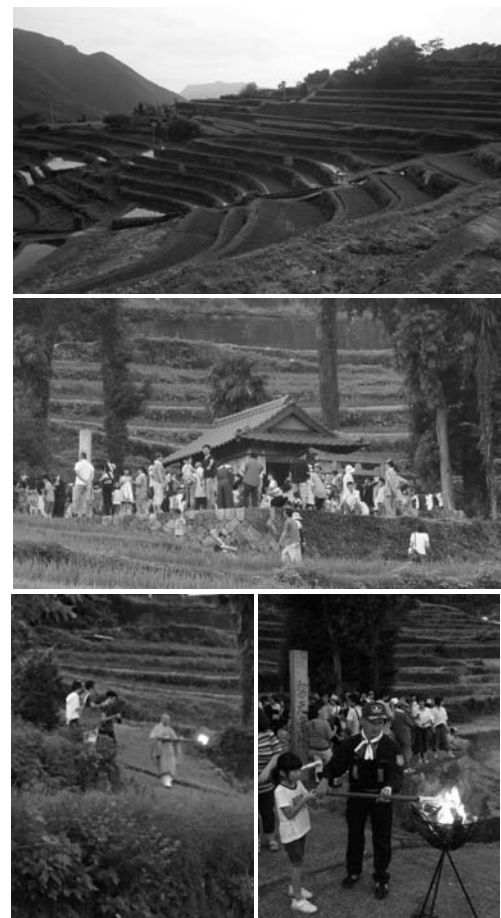
肥土山自治会の資料によれば、かつての虫送り行事は、標高の一番高い中山地区から始まり翌日が肥土山地区、そして下流域へと日をずらして順に行い、最終的に海に虫を送り出したという。現在は市街地化した平野部では行われず、中山の虫送りは、肥土山の虫送りの翌日に行われている。

中山の虫送り行事が中断した背景は、『日本の棚田百選』に選ばれた現地に立てば納得がいく。運営の困難さが想像できるのである。

(2) 光のパノラマと運営を支える消防団

中山の虫送りの特徴は、高低差のある棚田を降りてくる2本の光のパノラマである。

虫送りの出発地点は2か所設けられており、1つは棚田の上部に位置する湯舟山（高壺山千手院蓮華寺）、もう1つは斜面の中腹で巨木に守られた荒神宮である。大まかな区分として、湯舟山は観光客も参加できる大人用、荒神宮は子ども用のスタート地点になる。荒



「日本の棚田百選」の中山千枚田（上）
子どもたちの集合場所である荒神宮（中）
湯舟山からの火と消防団の支え（下）

神宮で待機する子どもたちには湯舟山の住職が火をもたらす。

中山の火手も青竹製である。小さな子どもは親に手を添えてもらい、年長の子どもは自らの成長を誇るかのように各々単独で火手を持って進むのも、ゴール地点でお菓子のご褒美が振舞われるのも肥土山と同様である。

ゴール地点となる中山春日神社は、例年10月に子どもも演者として参加する伝統の農村歌舞伎の開催場所でもある。茅葺屋根の舞台小屋は、昭和62（1987）年に国の重要有形民俗文化財に指定された。境内は野外演劇シアターのようになっており、神様は客席最後部の一番高い場所から舞台を見下ろしている。

中山の虫送り行事の運営を支えているのは

地元消防団とボランティアの方々である。斜面の畦道で2本の動線を同時に運営するのは容易ではないはずだが、話を聞くと「消防団は何でもやるんですよ」と笑顔が返ってきた。

(3) 唱え言

中山の虫送りでは、子どもたちは映画と同様の唱え言をいいながら進んでいた。

トモセ トモセ

これを「灯せ、灯せ」と解すると囃し言葉になってしまい不自然である。まして、住職や消防団の方に「灯せ」などという失礼な字はいない。

たとえば、兵庫県出身の柳田國男は、自身の回想として次のように述べている。

「自分の少年の頃の記憶では、播州などでは単に『実盛御上洛 稲の蟲や御供せい』と云うたやうに思ふ。」（「実盛塚」より）

また、『日本の民俗33岡山』は、県下で一般的だったものとして次の一例をあげている。

オヌカドンハ キョウヘマイレ

サネモリドンハ オトモセイ

アトデイネガサカエル

隣接する肥土山の虫送りに実盛が登場する以上、実盛か稲虫を念頭に「供をせ、供せ」と唱えたのではないだろうか。少なくとも虫送りの唱え言としては、この方が自然である。

4. 肝心な部分を地域で育てる

(1) 少子化の現実

肥土山の八幡宮でも、中山の荒神宮でも駆け回る子どもたちは、少ないとは感じなかった。ところが、実際には肥土山地区の小学校は公民館になっており、中山地区の小学校も幼稚園を併設した公民館になっている。

子どもたちがあまりに元気だから、実人数以上に大勢いると感じただけで、この地域も少子化という現実の例外ではなかった。

ただし、虫送り行事からも分かるように、地区の方々の子育てに正面から向き合っている。

(2) 肝心な部分を地域が育てる

中山春日神社の舞台小屋の前で、子育て世代の3人のお母さんに話を聞くことができた。

Aさんは、虫送り行事が復活して以来、毎年ボランティアをされている方で、映画撮影時の話、歌舞伎舞台の構造、江戸時代から使われてきた数百着に及ぶ衣装や道具類、多数の演目台本のことを話してくれた。

Bさんは、昨年小学生の娘さんと自身の母親と一緒に舞台に立ったときのことを幸せそうに話してくれた。いわゆる歌舞伎というと男性俳優のイメージだが、母娘三代の舞台はどんなにか楽しい思い出になったに違いない。

Cさんは、数年前に関西から転居してきた方で、引っ込み思案だったお子さんが、こちらに来てから誰に対しても挨拶ができるようになったと話してくれた。明らかに態度が積極的になったと実感しており、ここでの子育てに非常に満足しているという。

特に印象的だったのは、異口同音に中山地区の子どもたちについて、「肝が据わっている子が多い」、「人前で自分の意見を堂々と言える子が多い」、「落ち着いた子が多い」という評判をよく聞くと強調したことである。

確かに、地域の晴れ舞台で子役として鍛えられるのだから、教室で話を聞くだけの環境に比べれば、コミュニケーション能力や人前で話す度胸が育つ可能性は高くなるだろう。地元の幼馴染や演技の大先輩である地域の大人たちを前に舞台に立つのだから、特別な教育環境といってもよいだろう。

3人のお母さんは、地域が子どもたちを育てている結果を素直に肯定した。子育てを先生という専門家に託し過ぎずに、肝心な部分を地域が引き受けているのである。

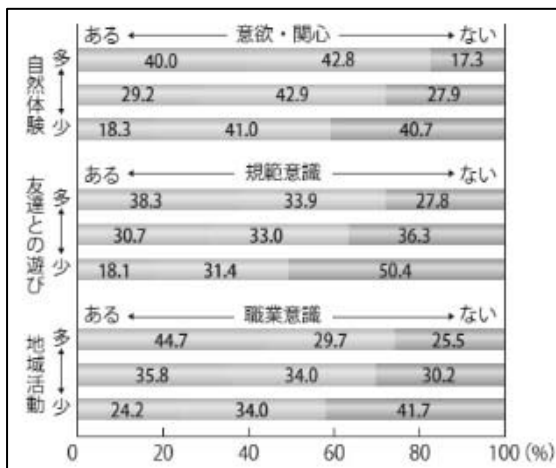
こうした話を聞けたのは幸運だった。当初

は虫送り行事のみに注目していたが、虫送りは、単体で存在する地域の伝統行事ではなく、農村歌舞伎やそれ以外も含めた地域の方々が作り出す生活環境の一部だったのである。

(3) 子どもの頃の体験の影響

下図は中山地区のお母さんたちの言葉を裏付けるような調査結果である。子どもの頃に「自然体験」や「地域活動」を多く経験した人の方が、大人になってからの意欲・関心や職業意識が高いことを示している。

図：子供の頃の体験と大人になってからの意欲・関心等の関係



出典：平成28年度版『子供・若者白書』（内閣府）

この調査を実施した国立青少年教育振興機構は、次のような言葉で報告をまとめている。

- ・子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い。
- ・幼少期から中学生期までの体験が多い高校生ほど、思いやり、やる気、人間関係能力等の資質・能力が高い。

5. まとめ

「悪い虫がつかないように」とは、年頃の子どもをもつ親の慣用句である。先達は、稲を子どものように育み、子どもを稲のように慈しんで育もうとしてきたのだろう。小豆島の虫送り行事等は、それを教えてくれている。

西日本の虫送りに関係深い齊藤実盛と実は切っても切れない関係にあった手塚光盛、その子孫にあたるのが、漫画の神様と称される手塚治虫（本名：治）である。人の生と死、過去と未来をテーマとした『火の鳥』に1コマだけ登場する手塚光盛の顔は、自画像である。虫は漫画の神様のトレードマークでもあった。単なる偶然とは思えない虫つながりである。

【参考文献】

- ・角田光代『八日目の蟬』中央公論新社・2007年
- ・福田アジオ、新谷尚紀、湯川洋司、神田より子、中込睦子、渡邊欣雄『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館・2000年
- ・文化庁『日本民俗地図Ⅰ解説書』1969年
- ・最上孝敬、宮本馨太郎、田原久、木下忠『日本の民俗1～47』第一法規出版・1971～1975年
- ・神野善治「虫霊と御霊」『季刊・自然と文化25』観光資源保護財団・1989年
- ・市古貞次『平家物語②』新編日本古典文学全集小学館・1994年
- ・『源平盛衰記』J-TEXT日本文学電子図書館
- ・『齊藤別当実盛』熊谷デジタルミュージアム・熊谷市江南文化財センター
- ・「首洗池」KAGA旅・まちネット・加賀市観光情報センター
- ・柳田國男「実盛塚」『定本柳田國男集第9巻』筑摩書房・1962年、初出1914年
- ・伊藤清司『サネモリ起源考』青土社・2001年
- ・『実盛物語（源平布引滝）』歌舞伎 on the web
- ・土庄町、小豆島町 各ホームページ
- ・「肥土山の虫送り」肥土山自治会資料
- ・天野武「イナムシ送り・小豆郡土庄町肥土山」『子どもの歳時記―祭りと儀礼―』柏書房・1984年
- ・中山農村歌舞伎、肥土山農村歌舞伎 小豆島観光協会ホームページ
- ・独立行政法人国立青少年教育振興機構『子どもの体験活動の実態に関する調査研究』報告書2010年
- ・池本美香『失われる子育ての時間』勁草書房・2003年
- ・深瀬泰旦「漫画の神様 手塚治虫とその一族」『月刊歴史と旅』秋田書店・2000年2月号
- ・手塚眞「太郎吉の子孫」『国立劇場第190回文楽公演解説書』独立行政法人日本芸術文化振興会・2015年2月
- ・手塚治虫『火の鳥<オリジナル版>復刻大全集 8（乱世編下）』復刊ドットコム・2012年